

# 「介護等体験」実習に関する教育心理学的研究

— (その3) 教職課程履修の大学生による調査を通して —

佐藤 嘉晃  
和田 美知子  
藤田 主一

## I. 研究の目的

平成10年度から実施された教職課程における「介護等体験」は、小学校あるいは中学校の教員を目指している学生を対象に、高齢者や障害児(者)等への介護や介助、またはこれらの人たちとの交流等を体験するものである。学生は、7日間を下らない範囲で社会福祉施設や特殊教育諸学校等でこれらを体験し、その終了証明が教員免許状申請時に必要となった。

介護等体験を規定している「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律(通称:介護等体験特例法)」では、この法律制定の趣旨が次のように示されている(平成9年法律第90号第1条より抜粋)。

「この法律は、義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点から、小学校又は中学校の教諭の普通免許状の授与を受けようとする者に、障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験を行わせる措置を講ずる」

このような教職課程に関する新たな改革について、その学問的な意味と新制度導入による教職課程履修の大学生等の意識構造を心理学的な手法によって研究した例は少ない。我々は、これまでに介護等体験の意義や実態等を、教育心理学関係等の学会や紀要論文の中で論じてきた<sup>1-7)</sup>。我々が研究対象にした学生は、法律施行後に初めて体験した短大生と大学2年生であったが、本研究では、大学4年生による新しいデータに基づいて研究を進めることにした。

## II. 研究の方法

### (1) 調査対象者:

- (A) 質問紙調査の対象者は、埼玉県内の共学の大学4年生85名である。
- (B) グループ面接の対象者は、埼玉県内の短期大学で教職課程を履修している5名の女

子学生である。

(2) 調査材料：

(A) ①過去における介護の経験の有無，体験先の施設名，体験に対する自由記述などの基本調査項目。

②体験後の意識を検討するために用意された50項目の質問紙調査票（具体的な項目は，結果の項の表2を参照）。

(B) グループ面接における質問項目は，佐藤・藤田・和田（2000）で使用されたものによった（具体的な項目は，本論文を参照）。

(3) 手続き：

(A) 調査材料①の自由記述は，7日間（2カ所）で体験で最も印象に残った事柄を記入させた。また，②については5件法で回答を求めた。なお，調査は平成13年6月に実施した。

### III. 研究の結果と考察

#### 1. 基本調査項目について

- (1) 過去に何らかの介護（今回の介護等体験以外：ボランティア，家族など）を経験したことがある学生は全体の13.8%，未経験の学生は86.2%であった。
- (2) 今回の体験先は，社会福祉施設では老人福祉施設（74.4%），特殊教育諸学校では養護学校（82.7%）が多かった。詳細は表1の通りである。

#### 2. 「介護等体験」後の意識に関する50項目質問票の分析結果について

- (1) 50項目の回答の比率について

表1 実習先の分類

実 習 先		頻 度	(%)
社会福祉施設	老人福祉施設	58	74.4
	精神障害者施設	18	23.1
	児童福祉施設	2	2.5
特殊教育諸学校	盲 学 校	2	2.5
	聾 学 校	12	14.8
	養 護 学 校	67	82.7

表2 「介護等体験」後における教職課程履修生の調査結果 (%)

質問項目	非常に そう思う	そう思う	どちらとも いえない	そ 思 わ な い	全然そう 思 わ な い
1. 施設の老人や子どもの気持ち理解できた	15.3	47.1	25.9	7.1	4.7
2. 手話や点字の勉強をしたい	10.6	36.5	37.6	9.4	5.9
3. もっと勉強しておけばよかった	23.5	40.0	29.4	4.7	2.4
4. 自分の思っていた体験ができなかった	3.5	18.8	40.0	28.2	9.4
5. わからないことはどんどん質問した	18.8	40.0	31.8	5.9	3.5
6. 施設の老人や子どもをすすんで援助できた	18.8	42.4	31.8	7.1	0.0
7. 福祉の仕事をくわしく知りたい	16.5	35.3	32.9	12.9	2.4
8. 知らないことばかりでくやしかった	22.4	25.9	37.6	7.1	7.1
9. 実習は忙しいだけだった	7.1	5.9	36.5	36.5	14.1
10. 施設の老人や子どもを理解しようとしてくれた	24.7	58.8	15.3	1.2	0.0
11. やさしく接することができた	36.5	49.4	12.9	0.0	1.2
12. 将来、福祉の仕事をしたい	7.1	15.3	48.2	16.5	12.9
13. もっと一生懸命に実習すべきだった	5.9	9.4	40.0	29.4	15.3
14. 実習はお手伝いだけで不満だった	5.9	7.1	35.3	32.9	18.8
15. 具体的な福祉のやり方を体験した	16.5	25.9	41.2	12.9	3.5
16. 実習の目標は、障害者を援助することだ	4.7	16.5	49.4	21.2	8.2
17. これからもボランティア活動に参加したい	16.5	28.2	42.4	9.4	3.5
18. 単位のためだと思ってしまった	2.4	14.1	24.7	30.6	28.2
19. 補助的な仕事しかさせてもらえなかった	9.4	20.0	36.5	22.4	11.8
20. 世の中には援助が必要な人のいることがわかった	37.6	54.1	4.7	1.2	2.4
21. 福祉の場で働く人は苦勞が多い	50.6	35.3	9.4	2.4	2.4
22. 福祉に関する授業をとりたい	17.6	20.0	45.9	11.8	4.7
23. 自分に最後までできるか心配になった	12.9	32.9	31.8	12.9	9.4
24. もっといろいろと教えてほしかった	22.4	34.1	30.6	8.2	4.7
25. 事前にその施設の内容を調べた	5.9	10.6	21.2	36.5	25.9
26. 福祉がもっと充実するとよい	56.5	38.8	3.5	1.2	0.0
27. もっといろいろな種類の体験をしたい	34.1	31.8	25.9	5.9	2.4
28. 義務感だけで実習してしまった	2.4	11.8	37.6	27.1	21.2
29. もっといろいろ体験させてほしかった	17.6	30.6	36.5	9.4	5.9
30. 言われた仕事はきちんとやった	38.8	54.1	5.9	1.2	0.0
31. 福祉は技術よりも思いやりだ	41.2	44.7	10.6	2.4	1.2
32. 介護等体験を人に話したい	29.4	23.5	34.1	9.4	3.5
33. 早く終わればいいと思った	5.9	14.1	32.9	18.8	28.2
34. 実習先を自由に選択させてほしかった	24.7	18.8	27.1	15.3	14.1
35. 福祉の現場が理解できた	17.6	48.2	24.7	7.1	2.4
36. 福祉はやりがいのある仕事だ	29.4	41.2	23.5	2.4	3.5
37. 障害者の教職に就きたい	11.8	14.1	44.7	12.9	16.5
38. 自分に努力が足りなかった	7.1	29.4	51.8	9.4	2.4
39. 一方的に仕事を言いつけられて不満だった	1.2	7.1	22.4	34.1	35.3
40. 実習中に福祉の勉強をした	4.7	8.2	27.1	34.1	25.9
41. 障害者の気持ちを考えるようになった	28.2	52.9	14.1	3.5	1.2
42. もっと福祉の勉強をしたい	18.8	28.2	40.0	9.4	3.5
43. 言われた仕事しかなかった	1.2	20.0	29.4	32.9	16.5
44. 実習期間が長かった	4.7	10.6	25.9	31.8	27.1
45. 学生らしい態度で実習した	21.2	47.1	29.4	1.2	1.2
46. 人の世話が好きになった	17.6	38.8	30.6	10.6	2.4
47. もっと体験して自信を持ちたい	20.0	31.8	31.8	11.8	4.7
48. 十分に介護してあげられなかった	5.9	25.9	41.2	23.5	3.5
49. 介護等体験は教職単位にやはり必要だ	30.6	25.9	23.5	12.9	7.1
50. 体験記録をきちんとつけた	16.5	21.2	29.4	20.0	12.9

表2は、「介護等体験」後の意識に関する50種類の質問項目への回答の基本集計結果をまとめたものである。“非常にそう思う”と“そう思う”とを加えたものを肯定得点，反対に“全然そう思わない”と“そう思わない”とを加えたものを否定得点として集計した。表3は，肯定得点と否定得点の割合が高い項目をまとめたものである。

表3 肯定・否定の割合が高い項目 (%)

質問項目	肯定	否定
26. 福祉がもっと充実するとよい	95.3	
30. 言われた仕事はきちんとやった	92.9	
20. 世の中には援助が必要な人のいることがわかった	91.7	
11. やさしく接することができた	85.9	
21. 福祉の場で働く人は苦労が多い	85.9	
31. 福祉は技術よりも思いやりだ	85.9	
39. 一方的に仕事を言いつけられて不満だった		69.4
25. 事前にその施設の内容を調べた		62.4
40. 実習中に福祉の勉強をした		60.0
44. 実習期間が長かった		58.9
18. 単位のためだと思ってしまった		58.8

肯定値が高い項目は、「26. 福祉がもっと充実するとよい」(95.3%)、「30. 言われた仕事はきちんとやった」(92.9%)、「20. 世の中には援助が必要な人のいることがわかった」(91.7%)、「11. やさしく接することができた」(85.9%)、「21. 福祉の場で働く人は苦労が多い」(85.9%)、「31. 福祉は技術よりも思いやりだ」(85.9%)などである。一方、否定値が高い項目は、「39. 一方的に仕事を言いつけられて不満だった」(69.4%)、「25. 事前にその施設の内容を調べた」(62.4%)、「40. 実習中に福祉の勉強をした」(60.0%)、「44. 実習期間が長かった」(58.9%)、「18. 単位のためだと思ってしまった」(58.8%)などである。否定値は、各項目に対してその意味を否定するのであるから、体験に参加した学生がすべてにわたって積極的に行動したとは限らないが、それでも体験への意味を十分に見出し、進取的に行動しようとする姿勢はうかがえる。

## (2) 50項目の因子分析について

5件法の回答のうち，“非常にそう思う”に5点，“そう思う”に4点，“どちらともいえない”に3点，“そう思わない”に2点，“全然そう思わない”に1点を与えて点数化し，50項目の主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った結果，意味ある2因子を抽出した。その因子構造は表4に示した通りである。

因子Iは、「17. これからもボランティア活動に参加したい」，「47. もっと体験して自信を持ちたい」，「46. 人の世話が好きになった」，「6. 施設の老人や子どもをすすんで援助できた」，

表4 「介護等体験」に関する質問項目と因子構造

質 問 項 目	因子 I	因子 II
17. これからもボランティア活動に参加したい	0.89	
47. もっと体験して自信を持ちたい	0.88	
27. もっといろいろな種類の体験をしたい	0.86	
46. 人の世話が好きになった	0.86	
6. 施設の老人や子どもをすすんで援助できた	0.85	
10. 施設の老人や子どもを理解しようとつとめた	0.85	
12. 将来、福祉の仕事をしたい	0.85	
36. 福祉はやりがいのある仕事だ	0.84	
3. もっと勉強しておけばよかった	0.83	
41. 障害者の気持ちを考えるようになった	0.82	
45. 学生らしい態度で実習した	0.82	
5. わからないことはどんどん質問した	0.81	
11. やさしく接することができた	0.81	
37. 障害者の教職に就きたい	0.81	
24. もっといろいろと教えてほしかった	0.78	
26. 福祉がもっと充実するとよい	0.78	
2. 手話や点字の勉強をしたい	0.77	
8. 知らないことばかりでくやしかった	0.77	
29. もっといろいろ体験させてほしかった	0.76	
30. 言われた仕事はきちんとやった	0.76	
20. 世の中には援助が必要な人のいることがわかった	0.75	
32. 介護等体験を人に話したい	0.75	
35. 福祉の現場が理解できた	0.74	
38. 自分に努力が足りなかった	0.74	
1. 施設の老人や子どもの気持ちが理解できた	0.73	
15. 具体的な福祉のやり方を体験した	0.73	
49. 介護等体験は教職単位にやはり必要だ	0.73	
31. 福祉は技術よりも思いやりだ	0.72	
21. 福祉の場で働く人は苦勞が多い	0.69	
50. 体験記録をきちんとつけた	0.68	
16. 実習の目標は、障害者を援助することだ	0.64	
40. 実習中に福祉の勉強をした	0.62	
48. 十分に介護してあげられなかった	0.61	
18. 単位のためだと思ってしまった		0.88
33. 早く終わればよかった		0.88
44. 実習期間が長かった		0.86
28. 義務感だけで実習してしまった		0.82
39. 一方的に仕事を言いつけられて不満だった		0.81
9. 実習は忙しいだけだった		0.76
14. 実習はお手伝いだけで不満だった		0.66
13. もっと一生懸命に実習すべきだった		0.61
19. 補助的な仕事しかさせてもらえなかった		0.60
34. 実習先を自由に選択させてほしかった		0.59
43. 言われた仕事しかしなかった		0.58

「10. 施設の老人や子どもを理解しようとしてつとめた」、「12. 将来、福祉の仕事をしたい」などから構成されている。介護等体験を前向きに捉え、積極的に老人や子どもを理解しようとする内容なので、『福祉前向き』因子と解釈した。

因子IIは、「18. 単位のためだと思ってしまった」、「33. 早く終わればよかった」、「44. 実習期間が長かった」、「28. 義務感だけで実習してしまった」、「39. 一方的に仕事を言いつけられて不満だった」などから構成されている。実習の空虚さや不満を述べているので、『裏切られた期待』因子と解釈した。

### 3. 自由記述の内容分析について

調査対象の学生が記述した内容を類似性の高いカテゴリで分類することを試みた。記述対象が「子ども」か「老人（高齢者）」かに分けた上で、記述内容を5つのカテゴリにまとめた。すなわち、「新しい体験への喜びと戸惑い」「子ども・老人の人柄や態度」「実習体験のつらさ・大変さ」「一生懸命生きている姿に感動」「福祉活動への意欲」である。1つの記述が1つのカテゴリで説明できる場合には1点、2つ以上にまたがる場合には主とするものを2つ選択し、各0.5点ずつを与えて点数化した。表5はそれらの結果をまとめたものである。今回は、老人福祉施設と養護学校での実習が多かった。

表5 「介護等体験」実習における自由記述の内容分析 (%)

自由記述の内容	子ども	老人	全体
新しい体験への喜びと戸惑い	50.0	65.2	57.6
子ども・老人の人柄や態度	23.3	7.6	15.5
実習体験のつらさ・大変さ	6.7	10.6	8.7
一生懸命生きている姿に感動	10.0	4.5	7.3
福祉活動への意欲	6.7	7.6	7.2
その他	3.3	4.5	3.7

子どもを記述の対象にした内容では、「新しい体験への喜びと戸惑い」への比率（50.0%）と「子ども・老人の人柄や態度」への比率（23.3%）が高いが、特に養護学校に通学している子どもの方が学生にやさしい態度で接近し、また学生自身が勉強等を教えた際に、子どもの素直な喜びを表す態度に触れるといった事実から、体験へのよい印象を表現していることが理解できる。

他方、老人（高齢者）を取り上げた記述内容では、「新しい体験への喜びと戸惑い」への比率（65.2%）が高く、それ以外は「実習体験のつらさ・大変さ」（10.6%）が続く程度である。特別養護老人ホーム等で生活している老人に接し、今まで経験したことがない喜びを感じたように思われる。また、老人介護には専門的でより高度な知識を持つ必要性を感じた学生や、老人介護の大変さに直面し、つらい体験を受けた学生も見受けられた。

いずれにしても、実習体験のつらさ・大変さの訴えよりも、戸惑いながらも貴重な体験の喜びを率直に述べている姿勢が見出された。また、老人や子どもが精一杯生きている姿やその人柄、態度に触れたことにより、体験へのよい印象を得たことも見逃すことができない。次に、自由記述の具体例をとりあげよう。

- (A) 5日間、福祉施設では寮母さんの苦勞が印象深いです。寮母さんの仕事を少しでもお手伝いできてとてもうれしかったです。風呂や食事の補助は、今まで体験したことがなかったので、とてもいい勉強になりました。我々若い世代が、今高齢化社会において積極的に動かねばならないことを改めて知りました。(男子：老人福祉施設，養護学校)
- (B) 人を外見だけで判断してはいけないこと。みんな一生懸命生きている。実習をおこなうまで、私自身、障害者を偏見の目で見ていましたが、今回、養護学校で実習したおかげで見る目が変わりました。(女子：老人福祉施設，養護学校)
- (C) 障害者に対しての今まで持っていた感情が変わった。最初は怖いと思う部分が少しあったが、生徒の純粋な心を感じたら、私まで心が洗われるようにやさしい気分になれた。今にも消えてなくなってしまいそうな弱い子ども達を見守ってあげたい，助けてあげたいと思った。教育実習に比べ，介護実習は2日間という短い期間だったが，生徒に対する愛情は，教育実習より強く感じた。かわいくてしかたなかった。(女子：精神障害者福祉施設，養護学校)
- (D) 障害者や老人の人たちも1人の人間として力強く生きていることに，とても心打たれました。(女子：老人福祉施設，養護学校)
- (E) いろいろな人に接したことによって，自分の気持ちが優しくなった気がしました。最終日に介助してあげた老人に「ありがとう。いなくなると淋しい」と言われて，感動しました。とても，自分のためになりました。(男子：老人福祉施設，養護学校)
- (F) いろいろな人たちと話ができて楽しかった。特に，養護学校の生徒とは仲良くできた。車イスのタイヤがパンクして，大騒ぎしたことがとても心に残っている。生徒はとても不安になっていたから，一緒にいてたくさん話などをして励ましてあげた。とても勉強になって良かった。(男子：老人福祉施設，養護学校)
- (G) お年寄りや体の不自由な子どもたちを介護するにあたって，自分が一生懸命がんばるのも必要だが，やはり，職員のチームワークというか，お互い協力しあってこそ，介護と呼べるのではないかと思いました。1人では絶対にできない仕事だと思います。実習先の職員の方々がお互いの欠点をうめあっているのを見てそう思いました。(女子：老人福祉施設，養護学校)
- (H) 人の気持ちになって行動したり，言葉に発することが，非常に難しいことだと思った。特に，言葉には気をつけるように心がけた。何が障害で，何が障害でないのかを，改めて深く考えさせられた。(女子：老人福祉施設，養護学校)

#### 4. グループ面接について

グループ面接を通して、体験についての聞き取り調査を行った。ここでは、具体的な質問に対する学生の生の声をまとめることにした。面接対象は、短期大学の2年生である。また、面接の対象校は特殊教育諸学校である。以下は各質問項目についての学生とのやりとりである。

##### (1) 実習先へ事前の下見に行きましたか？

- ・行かなかった。
- ・4月に大学生は説明を受けたが、短大生は「後で」ということで資料を渡されて帰った。
- ・教科担当の先生の授業で事前指導を受けるという話だったが、さらっと終わってしまった。
- ・説明を受けず用紙だけもらって帰った。
- ・教務課の方が教科担当の先生の授業に入ってこられて資料を渡された。後は、随時呼び出すと言われた。しかし、5日間の方だけ呼び出された。
- ・事前のガイダンスは十分ではなかったように思う。
- ・5日間のガイダンスの方は名前だけで、養護施設か老人福祉施設かよくわからなかった。  
「当日来てください、バスがないからタクシーに乗って来てください」と言われた。お昼はお金がいきますと言われた。
- ・事前打ち合わせはなかった。当日来るように言われた。
- ・打ち合わせの時は実習中だった。事前打ち合わせはなくてもいいと言われた。

##### (2) 勤務（体験実習）時間、休憩時間はどうなっていましたか？

- ・8時30分～3時30分（チャイムがないから休憩は適当だった）。
- ・8時50分～3時前（反省文を書いた後は、流れ解散）。

##### (3) 昼食はどうしましたか？

- ・お弁当（自分で作った）。
- ・コンビニ弁当。
- ・牛乳をいただいた。
- ・つまみ食いをして実態を確かめた。

##### (4) 服装はどんなスタイルでしたか？

- ・ジャージ（汚れてもいいもの）。
- ・上履き持参。

##### (5) 実習の内容はどんなものでしたか？

- ・トイレの介助（同性介助）。
- ・勉強を見てあげた。
- ・絵本を読んであげた。
- ・カルタ形式で一緒に取った。



- ・国語，社会の勉強を見た。
- (6) 実習生の居場所（机・イスなど）はありましたか？
- ・プレイルーム（場所は決まっていた）。
  - ・机，イスは並べてあった。
- (7) 実習の記録はつけましたか？
- ・施設からあらかじめ配られた用紙に1日の実習の感想を書いた。
  - ・大学から配られた用紙に2日間の感想を書いて提出した。
- (8) 実習で印象に残ったことは何でしたか？
- ・養護学校は自分たちとは別世界の感じだった。学校に行って車イスに乗っているだけでなくいろいろな症状の子がいて，同じ世界に入った感じがした。
  - ・養護学校の先生は，生徒を特別扱いしているのかと思ったが，そういうことはなく普通の五体満足の子と同じに接していたのが印象的だった。
  - ・生徒が可愛かった。教育実習で出会った子どもたちよりも，介護実習で出会った生徒たちの方が自分の中に深く残っている気がして「ありがとう」と言ったら，「お姉ちゃんありがとう」と言ってくれて，すごく感激した。
  - ・子どもたちが明るかった。たった2日間であったが，外から来た人間をすごく受け入れてくれた。人なつっこく心を開いてくれて，私も介護しやすかったし，触れ合いがよかった。別れるとき，さみしくて涙をポロリとしたりして，子どもたちが可愛かった。また，純粹だった。
  - ・先生と生徒が，他の普通学級の生徒たちより仲が良かった。普通学級の先生と生徒の仲は，ぎこちないところがあるが，養護学校の生徒たちは，わからないことはわからないとちゃんと伝えるし，「できない」と言っても，先生に「できるんでしょう」と言われるので，やる努力をする。1人前に生活できるようにすることが目標だったので，養護学校の先生は全部お手伝いするのだと思っていたが，介護実習をしてイメージが変わった。
  - ・たった2日間なのに，人生観が変わった。実習は短かったなので，もっと多くしてほしい。
  - ・車に乗ってきた人がいた。名乗り出ないので皆怒られた。不公平であると思う。
  - ・「去年の実習生より働いてくれたので楽にさせてもらった，とてもよかった」と先生に言われた。
  - ・できないところを助けてあげる重要性を学べた。
- (9) 大学に望むことはありますか？
- ・わからないことが多い。
  - ・事前に細かく教えてほしい。
  - ・地図がなかった。よく行けたと思う。あちこち聞いて苦労した。

- ・詳しい地図が教務課にあると言われて出向いたが、もらった地図と同じで大まかなことしか書いていないので迷った。
  - ・実習先が自宅から近いところがよかった。
  - ・実習先を全部自分で選べる方がよかった。
- (10) 5日間の体験で期待することは何ですか？
- ・感動したい。泣きたい。
  - ・5日間の方でも泣きたい。
  - ・お年寄りの方と仲良くして終わりたい。
  - ・施設の対応はそれぞれ違う。幻滅もあるだろう。特に、おばあちゃんと接する機会がなかったので、いろいろなお話を聞きたい。
  - ・名前を覚えていただきたい。
  - ・2日間で味わえなかったことを5日間で感動したい。

教職課程の「介護等体験」について、試行錯誤を繰り返しながら、学生にとってよりよい体験を目指し、教務課（教職担当）と連携を密にしながら取り組んできた。体験自体、回を重ねるごとに実り多いものとなっている。すなわち、受け入れ側の施設および諸学校の指導は、我々の予想をはるかに上回る誠意に溢れたきめの細かい内容であり、学生に深い感動を与えている。

学生からの聞き取り内容を通覧すると、送り出す側（教職課程の教職員）には少々つくづく感じる注文もあるが、学生の率直な言葉を謙虚に受けとめ、これから体験を行う学生に少しでもよい環境が整うための大切な資料としたい。教員の資質向上が叫ばれている折から、このような研究が少しでも役立つことがあれば幸いである。今後は、「介護等体験」を受け入れる側の施設や諸学校での調査を試みたい。

（付記）本研究は、平成13年度城西大学学長所管研究奨励金の交付を受けて実施された研究の一部である。

#### 【参考文献】

- (1) 藤田主一・佐藤嘉晃：『「介護等体験」実習後における短大生の意識構造』。1999、日本教育心理学会第41回総会発表論文集。
- (2) 佐藤嘉晃・藤田主一・和田美知子：「教職課程履修生の教育観に関する研究——（その1）『介護等体験』実習の調査を通して——」。1999、日本応用心理学会第66回大会発表論文集。
- (3) 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一：「教職課程履修生の教育観に関する研究——（その2）『介護等体験』実習の調査を通して——」。2000、日本応用心理学会第67回大会発表論文集。
- (4) 藤田主一・佐藤嘉晃：「教職課程履修学生の『介護等体験』後の意識構造」。2000、日本教育心

理学会第42回総会発表論文集。

- (5) 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一：「教職課程履修生の教育観に関する研究——（その3）『介護等体験』実習の調査を通して——」。2001，日本応用心理学会第68回大会発表論文集。
- (6) 佐藤嘉晃・藤田主一・和田美知子：「『介護等体験』実習に関する教育心理学的研究——教職課程履修学生による実習後調査に基づいて——」。2000，城西大学女子短期大学部紀要第17巻第1号。
- (7) 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一：「『介護等体験』実習に関する教育心理学的研究——（その2）教職課程履修学生による実習後調査に基づいて——」。2001，城西大学女子短期大学部紀要第18巻第1号。